

よりよい学び方を目指す児童を育てる

総合的な学習の時間の指導に関する研究

—学習の状況を振り返り、その結果を活用する評価活動を中心に—

盛岡市立米内小学校 教諭 及 川 一 也

I 研究目的

総合的な学習の時間においては、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育てることが求められている。そこでは、情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方などについて、よりよい学び方を身に付けることができるようにすることが重要である。

しかし、本校児童の実態をみると、体験的な活動、製作や表現の活動などに楽しんで取り組んでいるものの、自分が設定した課題が適切かどうかを考えたり、課題追究の状況を課題や学習計画と照らし合わせて振り返ったりする段階まで十分に育っているとはいえない。これは、児童が活動と活動との内容や方法のつながりを意識せずに、一つ一つの活動に取り組むことに満足してしまっていることや、自分の学習の状況を振り返り、学び方について見つめ直すことができるような指導が十分ではなかったことによると考えられる。

このような状況を改善するためには、単元の学習過程に、活動の段階に応じた観点と方法で学習の状況を振り返り、その結果を活用して改善・修正を加えながら学習を進めていくことができるような評価活動を位置付けることが必要である。

そこで、この研究は、学習の状況を振り返り、その結果を活用する評価活動を中心に、よりよい学び方を目指す児童を育てる指導について明らかにし、小学校における総合的な学習の時間の指導の改善に役立てようとするものである。

II 研究仮説

総合的な学習の時間の単元の学習過程「課題設定」「追究」「表現・発信」の各段階において、段階に応じた観点に沿って行った自己評価に客観性をもたせ、自分の学習の状況を認識することができる評価活動を行わせれば、児童は学習活動を改善・修正する方法や自分の学び方のよさに気付くことができ、よりよい学び方を目指す児童が育つであろう。

III 研究の内容と方法

1 研究の内容

- (1) よりよい学び方を目指す児童を育てる総合的な学習の時間の指導に関する基本構想の立案
- (2) よりよい学び方を目指す児童を育てる総合的な学習の時間の指導に関する実態調査及び調査結果の分析と考察
- (3) 学習の状況を振り返り、その結果を活用する評価活動を取り入れた総合的な学習の時間の指導試案の作成

- (4) 指導実践及び実践結果の分析と考察
- (5) よりよい学び方を目指す児童を育てる総合的な学習の時間の指導に関するまとめ

2 研究の方法

- (1) 文献法 (2) 質問紙法 (3) 指導実践

3 指導実践の対象

盛岡市立米内小学校 第4学年 1学級（男15名 女15名 計30名）

IV 研究結果の分析と考察

1 よりよい学び方を目指す児童を育てる総合的な学習の時間の指導に関する基本構想

- (1) よりよい学び方を目指す児童を育てる総合的な学習の時間の指導に関する基本的な考え方

本研究におけるよりよい学び方を目指す児童の姿を「学習活動の各段階で、意欲をもってお互いの学び方のよさを認め合いながら自分の取り組みを振り返り、学習活動の内容や方法をよりよいものに改めながら活動できる児童」ととらえる。この姿に近づくためには、よりよい学び方を目指す意識と力の両方が高まること

【表-1】よりよい学び方を目指す児童の姿の構成要素

構成要素	意 味
有 用 感	課題を解決するための方法がよりよくなったのは、評価活動が役立っているからだという意識
見つめる力	自分の学習の状況から、よさや問題点を見つめる力
取り入れる力	互いの学習の状況を見合い、よさを取り入れる力
活用する力	学習活動を改善・修正する方法や方向性を見いだすために、自己評価の結果を活用する力

が必要であると考え、よりよい学び方を目指す児童の姿の構成要素を【表-1】のようにとらえる。

- (2) 学習の状況を振り返り、その結果を活用する評価活動のとらえ方

ア 学習の状況を振り返ること

学習の状況を振り返るとは、活動の段階に応じた評価の観点に沿って、学習活動の状況を児童自らが認識し、自己評価することである。適切な自己評価が行われるためには、「自分を客観的に認識する態度」を育成することが必要であると考え。

イ 自己評価の客観性を高めること

自分の学習の状況を自ら振り返り、自ら学習活動を改善・修正しながら学習を進めるためには、「メタ認知」の能力を高めることが求められる。しかし、「メタ認知」の能力が発達する過程にある児童にとって、自己評価は評価の判断が不確かなものになりがちである。そこで、自己評価の客観性を高めるために相互評価を取り入れる。

ウ 結果を活用すること

結果を活用するとは、評価活動によって得られた学習の状況についての情報をもとに、学習活動を改善・修正する方法や次の学習活動への方向性を明らかにし、それを学習活動のなかで生かそうとすることである。そのためには、児童自身がよりよい学び方を目指すために必要なことを具体的に認識させるようにすることが重要と考える。

- (3) 学習の状況を振り返り、その結果を活用する評価活動を取り入れた指導の展開

（本資料では本文を省略し、概要を【図-2】基本構想図に示す）

- (4) よりよい学び方を目指す児童を育てる総合的な学習の時間の指導に関する基本構想図

これまで述べてきた基本構想についてまとめたものが次頁【図-2】の基本構想図である。

2 学習の状況を振り返り、その結果を活用する評価活動を取り入れた総合的な学習の時間の指導試案

- (1) 指導試案作成の観点（本資料においては省略する）
- (2) 指導試案

ア 評価情報の活用

学習の状況を適切に振り返らせるために、児童一人一人が学習の各場面での方法、成果、気付き、疑問点などの評価情報を模造紙上に配置し、それらの関連を矢印で表し、どのように関連するののかを書き込み、学習の状況を見渡すことができるようにさせる。

イ 相互評価が効果的に行われるようなグループの編成

相互評価を行うグループ編成については、評価の対象となる活動の内容、評価の観点を考慮して、①課題に共通性のある児童のグループ、②追究方法に共通性のある児童のグループ、③共通性のない児童のグループのように編成し、相互評価を行わせるようにする。

ウ 評価活動の結果を活用するためのカード

自己評価及び相互評価の活動をとおして明らかになったことを活用できるようにするため、「評価結果を活用するためのカード」を利用する。このカードに、明らかになった学習活動を改善・修正する方法や次の学習活動への方向性を具体的な行動目標として文章化させ、自分が次の学習活動において何をしたらよいのかを、より明確に意識できるようにさせる。

エ 自分自身を見取り、語りかけるもう一人の自分の活用

客観的に自分を見つめることができるようにさせるためには、「自分自身を見取り、語りかけるもう一人の自分」を意識することができるようにすることが有効と考える。そこで、児童一人一人に、自分を客観的に見つめるもう一人の自分（キャラクター）を設定させ、評価活動においては、そのキャラクターからのメッセージという形で自己評価を文章化させる。

これまで述べてきたことをもとに、学習の状況を振り返り、その結果を活用する評価活動を取り入れた総合的な学習の時間の指導試案を作成した。（【図-2】にその略図を示す）

(3) 検証計画

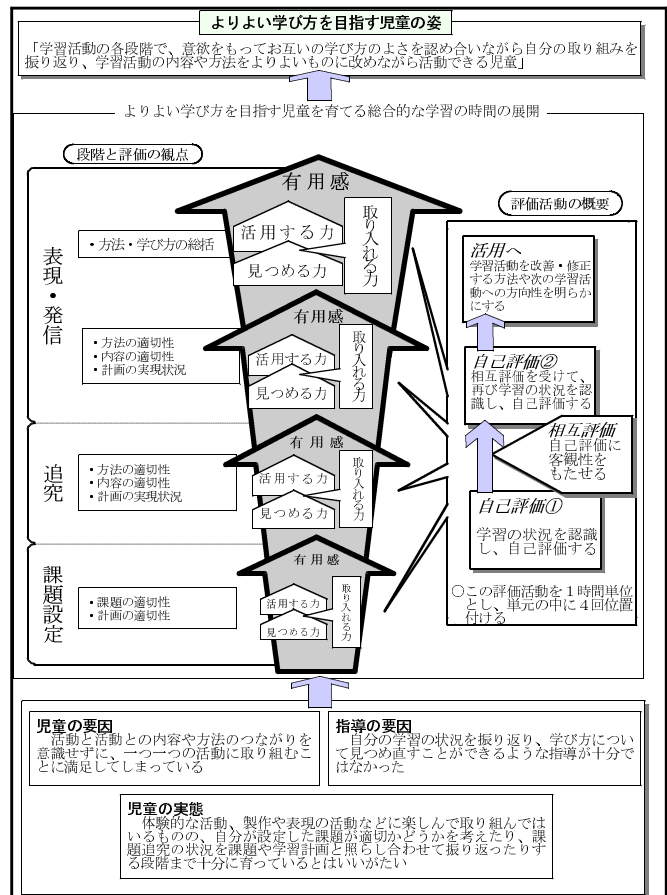
指導試案の妥当性を見るために、意識の変容状況については事前と事後に調査を行い、力の状況については児童のポートフォリオをもとに検証する。また、無作為に抽出した個別児童の意識と力の状況について質問紙法と児童のポートフォリオをもとに検証する。（判断基準表は本資料では省略する）

3 指導実践及び実践結果の分析と考察

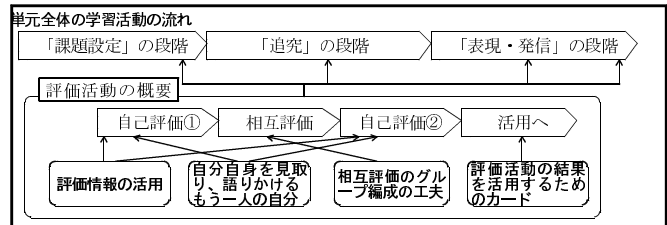
(1) 指導試案に基づく指導計画（本資料においては省略する）

(2) 指導試案に基づく指導実践の概要

「共に生きる社会」をテーマに25時間の指導実践を行った結果、学習の状況を振り返り、その結果を活用しながら次頁のような学習活動が展開された。



【図-1】よりよい学び方を目指す児童を育てる総合的な学習の時間の指導に関する基本構想図



【図-2】学習の状況を振り返り、その結果を活用する評価活動を取り入れた総合的な学習の時間の指導試案略図

「課題設定」の段階 (第1時～第7時)

「追究」の段階

オリエンテーション

○自分自身を見取るもう一人の自分(キャラクター)の設定



キャラクターは、
 ・学習の様子をあたかも自分目で見ているよ。
 ・自分のテーマや計画のおおりに進んでいるか、気を付けて見ているよ。
 ・学習の進め方について、アドバイスや応援をしてくれるよ。

補充資料
 【資料-5】参照

課題設定のための体験



両手と片足に障害をもつ歌手、レーナ・マリアの生き方に触れる。(写真はVTRから)



車いす体験

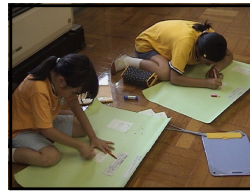


目かくし歩行体験

課題の設定

追究計画の作成

共通テーマ、個人課題、追究の内容と方法を模造紙上に配置して、追究の計画書を作成する。



追究計画作成の後に評価活動 (1回目)

追究活動



図書室の本を使って追究



パソコンを使って追究



電話でゲストティーチャーを依頼

【自己評価の観点】

《課題の適切性》

① 自分で、「おもしろそうだな」「やってみよう」と思えるテーマになりましたか？
 ② 大きすぎるテーマ、小さすぎるテーマになっていませんか？

《計画の適切性》

③ 計画は、個人テーマとずれていませんか？
 ④ 「やること」と「やり方」で直した方がよいところはありますか？
 ⑤ 2週間の予定とくらべて、「やること」が多すぎませんか？少なすぎませんか？

【自己評価の観点】

《方法の適切性》

① 調べ方を考え直した方がよいところはありますか？

《内容の適切性》

② 調べた内容は、それでよいですか？たりなかったり、計画とずれたりしていませんか？

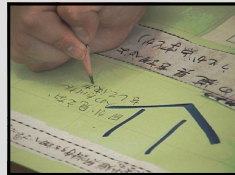
《計画の実現状況》

③ 今週中に、調べ終わりそうですか？
 ④ 新しく調べることはありませんか？

評価活動

評価情報の活用

模造紙上で評価情報を関連付け、自分の学習の状況を概観できるようにする。



関連が見えるように

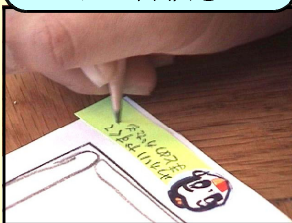
小さすぎるテーマ
 だと思ふよ

ぜんぜん図書室の本で調べるのは、むずかしいと思ふよ

自分のなまえやわたしのなまえいかにいろいろやってみよう

相互評価を書き込んだ付箋紙の例

自己評価①



キャラクターと相談しながら観点にそって自己評価し、その結果を付箋紙に記入し、計画書に貼る。

相互評価



グループ内で自己評価の結果を相互評価しあい、その内容を付箋紙に記入し、計画書に貼る。

キャラクターの活用

「自分自身を見取り語りかけるもう一人の自分」を意識させる。

自己評価を書き込んだ付箋紙

手言話っていろいろあるから、そのいろいろのうちから1つ2つくらいえらんだらー

オリエンテーションで作成したキャラクターのシール

相互評価のグループ編成の工夫

活動や評価の観点から、その都度適切なグループを編成する。

(第8時～第15時)

「表現・発信」の段階 (第16時～第25時)



ゲストティーチャーのみなさんに、たくさん教えていただきました。



追究の途中で評価活動 (2回目)

表現・発信の計画

【計画書の概要】

個人の課題

発表会での発表の内容と方法



新聞のレイアウト

記事の大きな内容

発信のための制作

発信のための制作の途中で評価活動 (3回目)

発信



発表会の様子

この他に、新聞を印刷して、保護者に配布している。

単元の学習活動の最後に評価活動 (4回目)

【自己評価の観点】

《内容の適切性》

- ① 記事の内容は個人テーマとあっていますか？
- ② 記事の内容は、十分ですか？足りないところ、くわしくないところはありませんか？

《計画の実現状況》

- ③ あと2時間で終わりそうですか？

《方法の適切性》

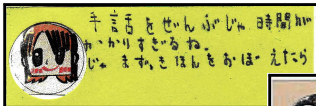
- ④ 書いた記事は、読みやすく、わかりやすい記事になっていますか？
- ⑤ 発表のしかたは、聞く人にとってわかりやすくなっていますか？

【自己評価の観点】

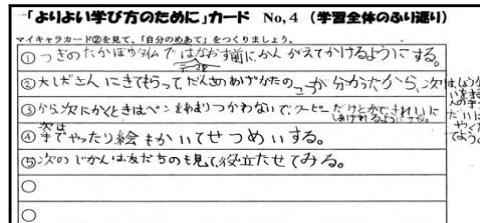
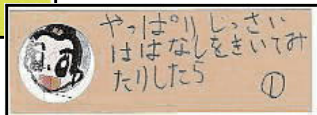
《方法・学び方の総括》

- ① テーマや計画づくりで、自分の学習のしかたのよいところはどんなところですか？
- ② 調べ学習で、自分の学習のしかたのよいところはどんなところですか？
- ③ 新聞作りや発表で、自分の学習のしかたのよいところはどんなところですか？
- ④ うまくいかなかった、もう少し何とかすればよかったと思うことはどんなことですか？
- ⑤ 振り返り活動は、どのように役に立っていましたか？

(1時間×4回)

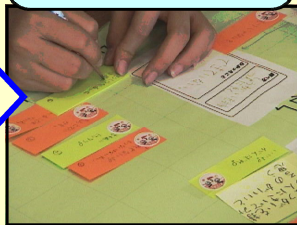


自己評価を書き込んだ付箋紙の例



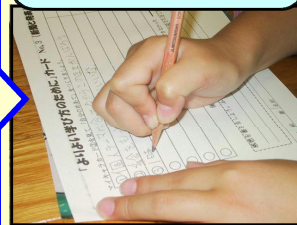
カードの例 補充資料【資料-6】参照

自己評価②



再び、観点にそって自己評価を付箋紙に記入し、計画書に貼る。

活用へ



学習活動の改善・修正の方法や次の活動の方向性を「目標」としてカードに記入する。

各評価活動でのグループ編成

	グループ編成
1回目	課題に共通性のあるグループ
2回目	課題や追究方法に共通性のないグループ
3回目	追究方法に共通性のあるグループ
4回目	課題や追究方法に共通性のないグループ

カードの活用

改善・修正の方法や次の活動への方向性を具体的な行動目標として文章化させる。

(3) 実践結果の分析と考察

指導実践によるよりよい学び方を目指す児童の姿の状況を見るために、検証計画に基づいて対象児童30名について、実践結果の分析と考察を行った。

ア よりよい学び方を目指す意識の変容状況

「有用感」の変容状況

【表-2】は、よりよい学び方を目指す意識として、「有用感」の事前と事後における変容をまとめたものである。本研究では、「有用感」の変容状況をとらえるために χ^2 検定（変化の検定）を用いた。

設問3・4からは相互評価にかかわる評価活動に対する有用感について、設問5からは評価活動全体に対する有用感について、有意差が見られた。これらは、学習活動の質が向上したことで、その要因である評価活動に対して「有用感」を認識できたためと考えられる。

設問3, 4, 5から、学習の状況を振り返り、その結果を活用する評価活動を取り入れた指導は、評価活動全体に対する有用感を高めるうえで効果があり、特に相互評価にかかわる評価活動に対する有用感を高めることに効果が期待できると考えられる。

イ 各段階でのよりよい学び方をめざす力の状況

(ア) 「見つめる力」の状況

【表-3】は「見つめる力」の状況を検証するために、評価活動における児童の自己評価の記述内容を判断基準に照らして判定した結果を児童個々についてまとめたものである。

+傾向を示した8人の児童の記述には、「もう少し、やりたいことを絞った方がいいな」「やっぱり、実際に話を聞いてみたら」のように客観的に自分の学習の状況を見取ることができているものが多い。これは、児童一人一人に自分を客観的に見つめるもう一人の自分（キャラクター）を設定させ、自己評価に活用したことと、模造紙上に評価情報を配置し、それらの関連が見えるようにすることで、学習の状況を適切に振り返ることができるようにしたことが有効に機能していたためと考えられる。一方、-傾向を示した3人の児童の記述には、客観的に自分の学習の状況を見取ることができていないものが多い。この点について今後の課題として考えていきたい。

以上のように児童個々の状況を見ると「見つめる力」は高まっているといえる。しかし、「見つめる力」の高まりはあまり大きくはなかった。これは、初期段階からAの判定の児童が多かったことによると考えられる。

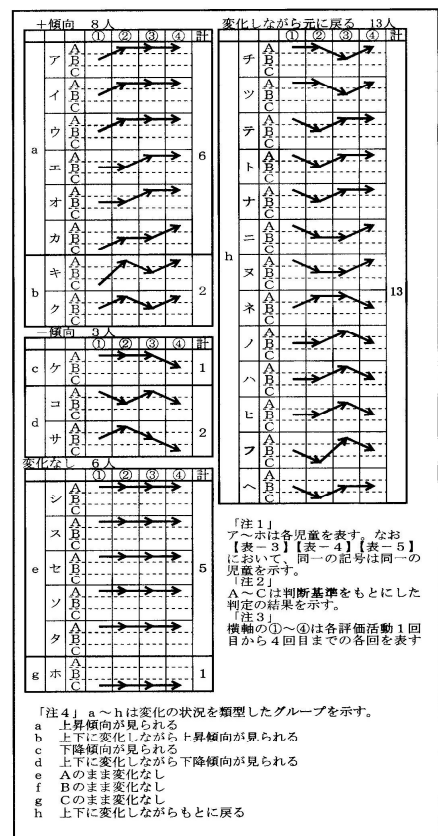
【表-2】よりよい学び方を目指す意識の変容状況

		N = 30 (単位:人)				χ^2 検定
設問内容	前後	+	-	計		
1 自分の作った課題や計画をもっとよくするために、課題や計画を見直そうと思いますか	+	20	1	21	2.29	
	-	6	3	9		
	計	26	4	30		
2 自分の調べ方やまとめ方をもっとよくするために、調べ方やまとめ方を見直そうと思いますか	+	17	3	20	0.90	
	-	7	3	10		
	計	24	6	30		
3 自分の調べ方やまとめ方をもっとよくするために、友達の意見やアドバイスを聞こうと思いますか	+	11	2	13	6.23*	
	-	11	6	17		
	計	22	8	30		
4 友達の調べ方やまとめ方を見てよいところを自分まねをしようと思いますか	+	6	1	7	14.22*	
	-	17	6	23		
	計	23	7	30		
5 たかばらタイムの学習をもっとよくするために、学習をふり返って見直すことが役立つと思いますか	+	6	3	9	8.89*	
	-	16	5	21		
	計	22	8	30		

「注1」事前調査は8月23日、事後調査は9月30日に実施した
 「注2」+としてとらえたのは、質問紙でアまたはイと回答したもの、-としてとらえたのはウまたはエと回答したものである。
 「注3」*は有意水準5%で、有意差があることを示す。
 「注4」 χ^2 検定で用いた公式は、下記に示すとおりである。
 なお、bは+反応から+反応へ、cは+反応から-反応へ変わった数を示す。

$$\chi^2 = \frac{(b-c)^2}{b+c} \text{ ただし } b+c \leq 10 \text{ のとき } \chi^2 = \frac{(|b-c| - 1)^2}{b+c}$$

【表-3】「見つめる力」の状況



(イ) 「取り入れる力」の状況

【表-4】は「取り入れる力」の状況を検証するために、評価活動における児童の「自己評価①」から「自己評価②」への記述内容の変化を、判断基準に照らして判定した結果を児童個々についてまとめたものである。

+傾向を示した18人の児童の記述には、「自己評価①」で「インターネットだけで大丈夫？」と記述したものが「自己評価②」で「実際に聞いてみるのもいいよ」というように問題点を改善・修正する方法が徐々に明らかになるなど、相互評価の結果を反映させているものが多い。これは、評価の対象となる学習活動の内容や評価の観点を考慮した少人数グループを編成したうえで自己評価の結果を交流し合う活動を取り入れたことが有効に機能していたためと考えられる。一方、-傾向を示した3人の児童の記述には、相互評価において他の児童から指摘されたことが反映されていなかったり、他の児童の学習の状況のよさを取り入れていなかったりするために、「自己評価①」と「自己評価②」の記述がほとんど変わらないものが多い。

以上のように児童個々の状況を見ると、+傾向の児童が多く、「取り入れる力」は高まっているといえる。

(ウ) 「活用する力」の状況

【表-5】は「活用する力」の状況を検証するために、評価活動において児童が自己評価をもとに学習活動の改善・修正の方法や次の学習活動への方向性を目標としてカードに記述したものを、判断基準に照らして判定した結果を児童個々についてまとめたものである。

+傾向を示した19人の児童の記述は「足が不自由な人にインタビューするのも計画に入れる」「手話をやるときに、声を出してやる(発表会)」というように、次の学習活動で何をどのようにするのが具体的に述べられている。これは、具体的な行動目標としてカードに文章化させる活動によって、次の学習活動において何をしたらよいかをより明確に意識できるようにさせることが有効に機能したためと考えられる。一方、-傾向を示した3人の児童の記述は具体性に欠け、学習活動を改善・修正する方法や、次の学習活動への方向性が明確な行動目標になっていないものが多い。

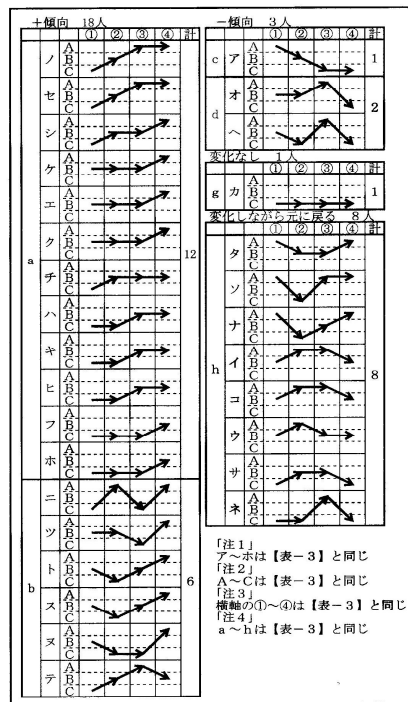
以上のように児童個々の状況を見ると、+傾向の児童が多く、「活用する力」は高まっているといえる。

以上のことから、「有用感」「見つめる力」「取り入れる力」「活用する力」が高まっていることがわかる。このことから、本研究の指導試案が妥当であったと考えられる。

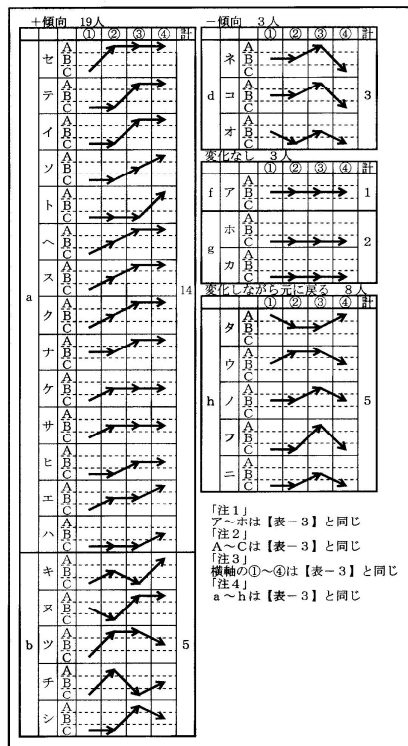
ウ 個別児童のよりよい学び方を目指す意識と力の状況

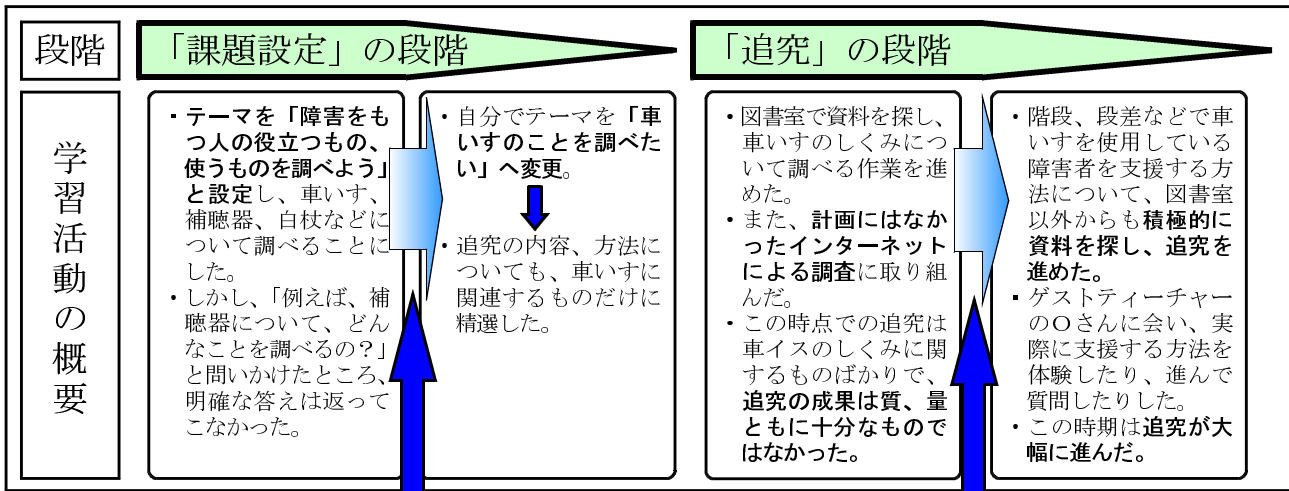
ここでは無作為に抽出した個別児童1名について、どのようによりよい学び方を目指し、よりよい学び方を目指す意識と力はどのように高まったのかを考察する。

【表-4】「取り入れる力」の状況



【表-5】「活用する力」の状況





追究計画作成後の評価活動の概要

観点①「おもしろそうだな、やってみたいなと思えるテーマになりましたか」

自己評価① おもしろいと思うよ (記述)

相互評価
グループ内の他の児童のテーマと自分のテーマの違いを気にして何度も見比べていた

自己評価② しぼりたかったから、やめた!

カード 記述できず (この時点では、テーマをどのように絞るか決定できずにいた)

観点②「大きすぎるテーマ、小さすぎるテーマになっていませんか」

自己評価① 大きすぎると思うよ (記述)

相互評価
「テーマが大きすぎるのでは?」 (2名から指摘)

自己評価② もう少し、少なくしたら?

カード 調べるものを一つにまとめる

評価活動によって、テーマを焦点化し、それに伴って追究の内容、方法を精選することができた。

判断結果

見つめる力	取り入れる力	活用する力
B	B	C

分析と考察
評価活動の記述では、「見つめる力」「取り入れる力」についても不十分な点が見られたが、特に「活用する力」については、**学習活動を改善・修正する方法や次の学習への方向性を具体的に考えることができないことが特徴的であった。**
これは、テーマを変更しようとしたために、模造紙上の計画書もそのままでは使えなくなり、追究計画の変更について検討するための手がかりを失ったためと考えられる。

追究の途中での評価活動の概要

観点②「調べた内容は、それでよいですか。たりなかったり、計画とずれたりしていませんか」

自己評価① ぜんぜん、たりなくないね

相互評価
「調べるのがちょっとたりないかな」

「何か増やしたいけど、何を増やしたらいいかわからない」

自己評価② (障害者を) 助けてあげられる人になるためのことも調べたらどうかな?

カード 助けてあげられる人になるためのことの調べ方を考えよう

評価活動によって、追究の成果の不十分さに気づき、次の活動への具体的な方向性を見出すことができた。このことによって、この後の追究活動が充実した。

判断結果

見つめる力	取り入れる力	活用する力
B	B	B

分析と考察
「活用する力」については、「助けてあげられる人になるためのことの調べ方を考えよう」というような学習活動を改善・修正するための方法や方向性について具体的な記述がカードに見られるようになった。
これは、計画書を修正したことで、その後の**学習の状況を概観できるようになったこと**と、相互評価で指摘されたことを素直に生かそうとしていることが有効に働いていると考えられる。

「表現・発信」の段階

・自分の追究の成果をもとに、**新聞作り**に意欲的に取り組んでいた。
 ・普段、書いたり作ったりする作業はあまりていねいではないのだが、新聞については、ていねいに仕上げようとする意識が感じられた。

・新聞記事の見出しを書き直して、何についての記事なのか一目でわかるようにしたり、**図をペンでなぞって彩色し直して見やすくしたりした**。また、他の児童からヒントを得て、書きかけの新聞をコピーして、**見づらい部分をチェックする**というアイデアを考え出し実践した。

次の單元へ

全体についての分析と考察

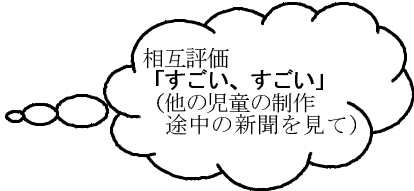
児童エの場合、特に相互評価の場において、積極的に他の児童のよさを見つけてようとしていたり、他の児童からの指摘を受け入れようとしていたり「**取り入れる力**」の高まる姿が見られた。また、模造紙上で学習の状況を概観できるようにした計画書を積極的に活用していた。これらのことが、「**見つめる力**」を高め、さらに「**活用する力**」の高まりに反映されていたと考えられる。そして、評価を活動に反映させ、活動を充実させることの繰り返しが、「**有用感**」を高めたと考えられる。

なお、各回の評価活動の記録は、紙面の都合上、すべての評価の観点のうち1～2つの観点に対する評価活動についてのみ掲載している。

発信のための制作の途中での評価活動

観点③「書いた記事は、読みやすく、わかりやすくなっていますか」

自己評価①「**とっても、読みやすいね**」



自己評価②「**もっと読みやすいように心がけよう**」

カード **もっと読みやすくするためにきれいに見出しや図を書く**

相互評価によって、新聞を見やすくわかりやすくするための工夫に気付き、その後の活動では、新聞の見出しや図を修正するなどして、読みやすい新聞を目指した。



完成した新聞

判断結果

見つめる力	取り入れる力	活用する力
A	B	B

分析と考察

自分の学習の状況を客観的に見つめている記述が多く見られるようになった。また、カードにも、改善・修正の方法や次の活動への方向性が一層具体的に記されるようになった。これは、相互評価において自分から積極的に他の児童のよさを取り入れようとしていることが「**見つめる力**」の高まりに反映し、より客観的に自分の学習の状況を見つめることができるようになったためと考えられる。

単元の学習活動の最後での評価活動の概要

観点②「調べ学習で自分の学習のしかたのよいところはどんなところですか」

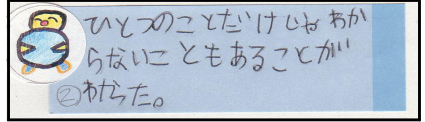
自己評価①「**本とインターネットで調べたのがよかった**」

相互評価

本とインターネットで調べてよかったね

ひとつのこと(調べ方の意味)だけじゃわからないこともあることがわかった

自己評価②



カード

今度も、調べるのをいろいろなやり方でやってみる!

観点④「うまくいかなかった、もう少し何とかすればよかったと思うことはどんなことですか」

自己評価①「**困ってそうな人の助け方(記事の題名)で、図を入れればよかった**」

相互評価

グループ内の他の児童の新聞に対し、「図がきれいでわかりやすいね」と評価

自己評価②

見る人も、図があればわかりやすいから、図を入れればよかった

カード

今度は、なるべく図でわかりやすくする

判断結果

見つめる力	取り入れる力	活用する力
A	A	A

分析と考察

客観的に学び方のよさを見つけることができていた。肯定的な評価が多くできていたことに、自分自身の取り組みに対する満足感がうかがえた。また、他の児童の学び方のよさを見つれたり、他の児童からの評価を受け入れたりすることで、「**見つめる力**」が高まった。そのことが、次の単元の学習活動に対する**具体的な行動目標**に反映され、「**活用する力**」を高めたと考えられる。

よりよい学び方を目指す意識の変容

意識	ア	イ	ウ	エ
1 自分の作った課題や計画をもっとよくするために、課題や計画を見直そうと思いますか		□		
2 自分の調べ方やまとめ方をもっとよくするために、調べ方やまとめ方を見直そうと思いますか		□		
3 自分の調べ方やまとめ方をもっとよくするために、友達の意見やアドバイスを聞こうと思いますか	□			
4 友達の調べ方やまとめ方を見て、よいところを自分もまねをしようと思いますか		□		
5 たかぼらタイムの学習をもっとよくするために、学習をふり返って見直すことが役立つと思いますか	○	●		

●は事前、○は事後、□は事前と事後とで変化がないことを示す

5 よりよい学び方を目指す児童を育てる総合的な学習の時間の指導に関する研究のまとめ

仮説に基づく指導実践において明らかになったのは、以下のとおりである。

- (1) 総合的な学習の時間に、学習の状況を振り返り、その結果を活用する評価活動を取り入れることは、よりよい学び方を目指す意識と力を高め、よりよい学び方を目指す児童を育てることに効果が見られること。
- (2) 学習の各場面での方法、結果、気付き、疑問点などを関連付けて配置し、学習の状況を概観できるような状態にすることは、それまでの学習活動の経緯や現在の学習活動の状況を視覚的に把握することを助け、学習の状況を適切に振り返ることができるようにするうえで役立つこと。
- (3) 相互評価を行うグループを、評価の対象となる活動の内容や評価の観点を考慮して編成することは、自己評価の客観性を高めるための相互評価をより適切なものにするうえで役立つこと。
- (4) 自己評価によって明らかになった、学習活動を改善・修正する方法や次の学習活動への方向性を具体的な行動目標として文章化させることは、次の学習活動において何をしたらよいかをより明確に意識できるようにさせることで、評価の結果を次の学習活動に反映させることができるようにするうえで役立つこと。
- (5) 自分を客観的に見つめるもう一人の自分（キャラクター）を設定し、キャラクターからのメッセージという形で自己評価を文章化する活動を取り入れることは、自分自身を客観的に見つめて自己評価ができるようにするうえで役立つこと。
- (6) 4回の評価活動を経過しても、よりよい学び方を目指す力に高まりがあまり見られない児童があり、児童個々の意識や能力に対応した評価情報の活用や、相互評価のためのグループ編成の改善方法についてさらに検討する必要があること。

以上のことから、総合的な学習の時間の指導に、学習の状況を振り返り、その結果を活用する評価活動を位置付けることは、よりよい学び方を目指す児童を育てることに効果が期待できると考えられ、本研究の研究仮説に基づく指導試案の妥当性が確かめられた。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

本研究は、学習の状況を振り返り、その結果を活用する評価活動をとおして、よりよい学び方を目指す児童を育てる総合的な学習の時間の指導について明らかにし、小学校における総合的な学習の時間の指導の向上に役立てようとするものである。そのために、よりよい学び方を目指す児童を育てる総合的な学習の時間の指導に関する基本構想に基づき、指導試案を作成し、指導実践を行った。その指導実践の結果に基づき、指導試案の妥当性を検討した結果、仮説の有効性を確かめることができ、よりよい学び方を目指す児童を育てる総合的な学習の時間の指導についてまとめることができた。

2 今後の課題

今後は、評価活動と学習活動が相互にその質をより一層高め合うことができるような在り方を探り、よりよい学び方を目指す児童を育てる指導を充実させることができるように努めていきたい。

【主な参考文献】

- | | | | |
|--------|-------------------|------|-------|
| 井上正明 著 | 「生きる力」の育成と自己評価の方法 | 明治図書 | 1997年 |
| 小島宏他 編 | 総合的な学習の評価計画と評価技法 | 明治図書 | 2000年 |